

藤森： してるのが苦痛のイメージしかなくて、何叱られてるのかわからなくなっちゃう。そういうことだけ結構気をつけています。

勝浦： では私、ちょっと自分の資料の説明をさせていただきます。「父親への評価」です。一言で言えばこういうことです。よく接している父親は、子どもから高い評価をされる。例えばカッコいいとか、スポーツが得意とか、顔やスタイルがよい、やさしい、仕事を頑張ってるなどなどの評価が、よく接している父親の場合のほうが高いですよ。だから、皆様方のようによく接していると、やっぱり先程の貯金もそうだと思うんですけど、子どもたちから高い評価を得られる。昔は父親が働く姿を見たりとか、職業と家庭が結びついていたので、父親は自分の後姿でも教育できたんですよ。それで子どもたちは父親の真似して遊んで、お手伝いをして、憧れの人として父親を見てた。でも今はなかなかそういう環境がありませんので、やっぱり意図的に交流していくことで、子どもたちにとって大切な人になっていく。そうやって父親として育っていくということなんです。

次に「厳しい評価」、両親が厳しい方かって聞くと、今の時代は母親の方を厳しいというお父さんが多いんです。昔の人間関係では厳しいだけの父親ってのはありえただけけど、ちょっと今は違うんですよ。父親のイメージってのはやっぱり時代ともに変わってるんですね。

「子どもたちが父親に求めていること」は、一緒に遊ぶことです。先程もちょっと申し上げましたが、子どもと楽しい時間をすごしてください。私は男の子と女の子について調べたりしているんですけど、男の子はお母さんと遊ぶのはそんなに楽しくないですね。お母さんってすごく大変なことをしなければいけないのに、いいところをお父さんに持ってかれるんですよ、遊び上手だと。それで、女の子もお父さんと遊びたい。男の子もお父さんと遊びたい。

「週末の過ごし方子どもの希望」、これは平成12年に週休2日制がはじまったときに、うちの大学の隣の小学校で調査させていただいたんですけど、父親と遊びたいって出てくるんです。母親と遊びたいなんて一つも出てきませんよ。ただ、父親も母親と同じように世話していると、あんまり遊んでほしいって言わなくなってね、子どもの人気はちょっと下がるかもわかりません。お父さんって子どもにとって遊び相手として魅力的です。ただ遊びの苦手なお父さんの場合は、一緒に料理をするのでも他のことでもいいです。子どもたちは、特に小学校まではお父さんをすごく求めています。今子どもの育つ環境から、男性の影がどんどん少なくなってるわけですよ。保育園の先生も女性。小学校の先生も女性が増えています。先程坂本さんの方から、別に父親だけじゃなくてもいい、家庭外にも斜めの関係があるかというお話がありましたが、先生方も女性。そういう意味で、今の時代は男性的なものは虐げられております。

子どもたちは乱暴な遊びが大好きだったりしますよね。お父さんのとても喜ばれるところ。手をつないで買い物に行くだけでもいいんですよ。一緒にコンピューターをやるでもいい。ここに女の子とお父さんの絵が出てくるんですがこれは、東京と長野の中学生、それからアメリカンスクールの中学生に子ども時代の楽しかった思い出の絵を描いてもらったんです。女の子の絵にはお父さんとお母さんが出てくるんですけど、男の子の絵にはお母さんはあまり出てこないんです。そういう意味で両性に支持される遊び、面白さ、楽しさってものが父親の世界なんですね。

それからもうひとつ「夫婦の勢力構造」っていうのがあるんですけど、父親の影が薄い家庭ってのは問題があるんですね。いるからには存在意義がなければいけない。夫婦がいて、お母さんが非常に支配的な場合、男の子

に心理的な問題がおきやすいっていうのがこれなんです。女の子の方にはそれほど大きな問題はない。要は、先程坂本さんがおっしゃったけども、仲間として、家族が一人一人がいる意義があるのがとても大事。もちろん、一人親家庭ってこともあるし、祖父母がいなくてこともあるけれども。その場合、他の近しい人間関係がやっぱり大事だと思う。

坂本： お父さんのための研修プログラムでもいうんですけど、お母さんと子どもだけだと対の関係で1対1なんです。お母さんは大人ですから圧倒的に強いパワーを持ってますから、支配したりコントロールしてしまう。そういう状況しか小さい頃から体験していないと、社会性を育てる段階になったときにとても不利なんですね。また、母親が子育てに行き詰っていたり、病んでいたりすると、子どもに攻撃的になったり、虐待などの不幸な事件も大体そういう母子だけの関係の所で起こっている。もうひとりの親、お父さんがいれば、やはりしっかりと3人の社会的な関係、構造を家庭の中に作ってほしいんです。お父さんとお母さんで子どもに対する言葉掛けが違っていたり、同じ状況の中にも感じ方が違っていてもいいんです。それを両親二人、大人二人が話しあったり、妥協したりする姿を見せるのが、子どもにとっては重要なんですね。

勝浦： そうなんですよ。坂本さんが夫婦仲がいいのがいいとおっしゃったけど、それは一人が支配してもう一人が唯々諸々と従う関係ではダメなんですね。

坂本： 調整したり、譲りあったりする姿を、子どもに見せることがとても重要。お父さんがいなくても、お母さんがいなくても、それをおぎなう近しい人たちのチームプレーで子どもに見せていくこともひとり親家庭のバックアップでは重要になってきます。

勝浦： いま坂本さんが3人の関係とおっしゃったけど、夫婦の息が100%合わなくてもいいんですよ。意見が違っていいんですよ。



坂本： 意見が違うけれども、子どものために一生懸命話合って、その根底に愛情や信頼が大人の間にあって子どもが感じるのが大事。ただ言い合っているだけ、けんかしているだけではいけません。

勝浦： まだ時間があるので、いい忘れたこと、これはいつおきたいという方が…。

坂本： お父さんの研修プログラムの中で、お父さんの役割を6つ紹介するんですね。一つ目は生きるために必要なものを与える。これはもう生存を保障するっていう基本的な役割ですよ。それから子どもと触れ合う。触れ合うことによって関係ができていくということ。それから心地よく世話をする。これは例えばオムツなどが濡れて泣いたら、替えてくれるとか、お腹が空いて泣いたらミルクをくれるとかですね。これはお父さんでもお母さんでも共通してできることです。それと愛情で包んであげる。いろんなことを教えたり、守ったりしてくれる。そして、子どもを何よりも

一番考えてくれる存在だということ。この6つをお父さんの役割としてお話しするんです。

日本のお父さんは、一番目の生きるために必要なものを与えるというのはできていっちゃう。それは生かすということで、大前提なんですけど、後の5つが人間をつくっていく行為なんですね。ふたつ目以降を意識して子育てしないと、自分自身を愛せなかったり、他者に対してうまくコミュニケーションができていなかったりするので、是非この6つの役割を時々意識してくださいってお願いするんです。

藤森： 父親支援のNPOなので、お父さんに対するメッセージということ。最近というか、去年くらいから「イクメン」「カジメン」ということが流行っていて、ちょっと言葉先行で僕もなんか「イクメン」といわれるとこそばゆいし、気持ち悪いし、自分ではそう思っていないんですけど、いろんなことをやんなきゃいけないと思っちゃうと大変なので、お父さんもあまり力を入れないうえがいいと思うんですよ。あんまりプレッシャー感じてこれもあれもやんなきゃっていうと、やらされ感がいっぱいになっちゃうんで。そうじゃなくて、まずはママの、妻の話を聞くところからはじめられたらいい。そういうところで、ママが精神的に安定すると子どもにも優しくなる。そうするとお父さんも気持ちがいいっていうふうになるので、そういうところからはじめたらいいのかなっていうのが私のメッセージです。

勝浦： お母さんにメッセージないですか？

藤森： ママにはですね、すごく大変だと思うので、なるべくお父さんとかいろんな方を頼ってもらいたいと思うんですよ。素直にやっぱり自分が大変だよと。育児ができないのは別にママのせいでもなんでもないので、大変なんだっていうことを出してもいいと思うんですよ。ヘルプを求めて、パパなり、周りのじいじ、ばあばなり、そうでない関係者に手伝ってもらおう。なるべく多くの大人で、多くの子どもを見てあげると、大人にとっても子どもにとってもやりやすいと思います。最後は門番の話じゃないですけど、パパをうまく育てて、大変かもしれないけど、おだてて育ててあげてください。

田中： 最近時々マスコミに出ている表現で、子育ての子を孤立の孤、「孤育て」という表現を見て、ちょっと背筋が凍る思いがしました。昔に比べて一人の子育てに携わる大人の人数が減っている、あるいはお母さんだけが一人で子育てをする為、子どもも親も孤立する、孤独になるという意味なんです。そうならないように何ができるかを考えています。というのは、私もあまり5時、6時に帰れない父親なので、とすると家に帰ったら子どもは寝てるだけっていうときもあります。そうすると子育てに何も携われないかといえばそうでなく、先程のお話にもありましたけど、その日にあったことを妻に聞いたりとか、聞いてあげるだけでも妻が楽になることがあるはず。もしくは、男性としての感性で答えられることもある。そういうことで、妻のサポートに間接的には貢献できているのかなと自分なりに思ったんですけど。そういうことで、「孤育て」にならないようにと思ってます。

勝浦： ありがとうございます。それではですね、フロアの方からご質問があれば。

来場者： 私は仕事の関係でずっと単身赴任をしているので、その辺の苦労話は、別の世界のようにでした。

勝浦： でも別の世界ではすみませんよ。お子さんはおいくついらっしゃいますか？ 10歳、ずっと単身赴任。そうするとお子さんとの付き合いというのはどんなですか？

来場者： 夏休み、冬休み一緒にすごしています。ただ、一緒に遊ぶ。それだけで、父親の愛情は通じていると…。あと、先程もありましたけど、携帯電話を毎

日しています。

坂本： 10歳だと、これから楽しみ、いっぱいできることが増えていきますよね。

単身赴任って本当に多いんです。私たちがプログラム全国でやりに行く、必ず一人二人いらっしゃる。やはり単身赴任だからこそ、一緒にいるときはとってもいい面が最初に見えるんだけど、しばらくするといろんなことが気になってきます。決して、問題は時間だけじゃないんですよ。だから単身赴任のお父さんが増えているので、どう子どもと接すればいいかの問題意識を皆さんでシェアしていただけるといいと思います。

金子： 特に僕がお勧めなのがスカイプ。ネットを通じて、海外などからもスカイプで無料でテレビ電話できます。そういうのをやると、子どもの顔の成長とかもわかっていいですよ。



坂本： 10歳くらいだと、これから段々働くなってということなのかが子どもの中でも出てくる。お父さんみたいな働き方ってどうなってんだらうって。子どもにとっては、すごく働く形としての興味対象で刺激されると思いますよ。ですから、いろんな形でコミュニケーションすることが大事です。

来場者： 大勢の人のお話を伺えてうれしかったです。あと子どもができて変わったことってなんですか。

藤森： 父親もゼロから始まるので、父親としての仕事が増えましてね。当然といえば当然なんだけど、最初はそれが理解できなくて自分の趣味をやりたいなどか思ったんですけど、やっぱり父親なんだから父親の仕事をしようと頭を切り替えてそうなっていました。そこが一番大きく変わりました。

田中： 子育てをしていると、母と子、父と子というつながりが強くなると思う。ところが、夫婦間のつながりが弱くなってしまいがちなのかなと思っていて、そこをやっぱり弱くしちゃいけないと。そもそもの子育てに当たって幹になるのがやっぱり父と母。父と母の考えをすり合わせたりとか役割分担を決めたりとかが大事なかなと思っていて、そこを弱くならないようにしたいなってことを心に留めています。

金子： 僕の実体験ですけど、いいか悪いかわかりませんが、まずは飲みに行く機会は減りました。子ども生まれる前までは僕のスケジュール優先でやりましたが、生まれると、まず子ども優先ですよ。そしてお母さん優先で、僕のスケジュールは一番最後になりました。

勝浦： 昔は自由でよかったあと。

金子： それはありますよ。やっぱり自由な時間ほしい、なのでそこはどうやって自由な時間をお互につくるようにするかっていうのをお互いが思いやりを持って、やることじゃないかなと。

坂本： 私たちが付き合っているカナダの専門家の方が、男性の成長ということをよくおっしゃるんですけど、少年から父、そして祖父への成長の旅路を男性にどうやって保証していくのか、それは社会を意識しなければいけないと。